

令和5年度(2023年度)

1.17 防災未来賞

ぼうさい甲子園

記録誌

命守るため 過去に学び、明日につなぐ

- 主 催 ● 兵庫県、(株)毎日新聞社、(公財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
(阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター)
- 後 援 ● 内閣府、総務省消防庁、文部科学省、国土交通省、兵庫県教育委員会、
神戸市、神戸市教育委員会、関西広域連合、
ひょうご安全の日推進県民会議
- 協 賛 ● 独立行政法人都市再生機構
- 事務局 ● 特定非営利活動法人さくらネット



兵庫県知事
齋藤 元彦

新年を迎えたばかりの1月1日、石川県能登地方を震源とする最大震度7の地震が発生し、各地で甚大な被害が生じました。災害はいつどこで起こるかわからない。このことを、多くのみなさんが改めて感じたのではないのでしょうか。

国内外から多くの温かい支援をいただきながら、阪神・淡路大震災からの復旧・復興を成し遂げてきた兵庫県。その経験と教訓を、被災地への支援に活かしていくことは、私たちの大切な使命です。

この1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」は、防災教育を通じ、震災の経験と教訓を次世代へ継承することを目的としてはじまりました。19回目を迎えた今回は、全国77の学校・団体から応募がありました。

東日本大震災や熊本地震・熊本豪雨、紀伊半島大水害などを経験した地域のみなさんをはじめ、全国のみなさんが、防災を“じぶんごと”と考え、真剣にアイデアを出しあい、取り組んでくれたことをとても心強く感じています。「ぼうさい甲子園」をきっかけに、一人ひとりが防災・減災について考え行動する「災害文化」が社会にしっかりと根づいていくことを願ってやみません。

来年は阪神・淡路大震災から30年の節目を迎えます。誰もが安全に、安心して暮らすことができる、災害に強い社会を実現するために、不斷の努力を重ねていかなければなりません。

「ぼうさい甲子園」に参加されたみなさんには、地域の防災をになう“主役”として、これからも大いに活躍していただくことを期待しています。

主催者あいさつ



毎日新聞大阪本社編集局長
木戸 哲

1995年1月17日に阪神・淡路大震災が発生した当時、私は入社3年目の駆け出しの新聞記者として、愛知県で勤務していました。発災後しばらくたってから神戸の街を取材する機会を得ましたが、自分が生きている間にこのように多くの人が犠牲になるような大災害は2度と起こらないだろうと思ったことをよく覚えています。しかし、実際には2011年に東日本大震災が発生し、近年も毎年のように大きな災害が日本各地で起きています。自然災害そのものを防ぐことができない以上、防災・減災の取り組みがますます重要になっていると痛感するとともに、主催者の一員として、この「ぼうさい甲子園」の重要性を改めて認識しているところです。

私は令和5年5月に着任し、今回初めて「ぼうさい甲子園」の審査に参加しました。順位を決めるのが役割とはいえ、文字通り甲乙つけがたい取り組みが多く、悩みに悩みながら審査に臨みました。

グランプリに選ばれた岩手県大槌町立吉里吉里中学校の取り組みは、2011年の東日本大震災後から継続してきた「地域を巻き込んだ防災学習」の成果が結実したものだと感じました。子どもたちの防災意識だけでなく、高齢者の避難意識が高まることも期待されるという、まさに地域と一体となった取り組みです。

小学生の部の「高知県四万十町立興津小学校」、高校生の部の「熊本県立熊本農業高等学校農業土木科3年生」、大学生の部の「静岡大学教育学部藤井基貴研究室」、特別支援学校・団体の部の「埼玉県立日高特別支援学校」、各部門でぼうさい大賞に選ばれた活動は、いずれも地域とのつながりが強く感じられるものでした。

児童生徒は次々と巣立ち、先生方も異動していくなかで、活動を継続して防災意識の向上につなげていくためには、地域との連携が重要だということを、皆さまの活動を通じて改めて認識しました。

今回は初めて応募したという学校、団体が30前後ありました。この「ぼうさい甲子園」が各地の防災意識の向上につながるのであれば、主催者としてこれ以上の喜びはありません。

「ぼうさい甲子園」を支えてくださっている全ての皆さまに感謝の言葉を申し上げます。



公益財団法人ひょうご震災記念 21 世紀研究機構副理事長
(阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター長)
河田 恵昭

今年度の 1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」は、北海道から熊本県までの 26 都道府県から、77 校・団体の応募がありました。新型コロナウイルス感染症の 5 類感染症移行に伴い、学校教育の現場では、概ね 4 年ぶりにコロナ禍以前の活動を再開されたところも多く、大変な状況の中で、多数の応募があったということは、19 回を重ねる本事業の趣旨が幅広く浸透してきているのではないかと考えています。

令和 5 年を振り返ると、2 月にトルコ南東部で発生したトルコ・シリア大地震では、多くの建物が倒壊し甚大な被害をもたらしました。日本国内においても、5 月の石川県能登地方地震、梅雨前線や台風による豪雨災害など、各地で災害が発生しました。

このような状況下、社会や環境が変わりゆく中で、教育活動を進めるにあたっては、児童・生徒・学生諸君とその保護者はもとより、先生、学校関係者、地域の皆さまもご苦労されていることと存じます。

今後も社会情勢は常に変化していくことになると考えていますが、防災教育の重要性は変わりません。その時代、時代に合わせた取り組み方があると思います。そして、この「ぼうさい甲子園」も同じように少しずつ時代に合わせながら、さらに 20 年、30 年と継続していきたいと考えています。皆さま方に、この「ぼうさい甲子園」という活動を十分、ご理解いただき、この活動がさらに広がっていくことを願っています。

講 評

各賞の審査にあたっては、「地域性」「独創性」「自主性」「継続性」の 4 つの観点を基準に、選考委員会で審査し、決定しました。応募があった防災教育や防災活動の取り組みはどれも素晴らしいものばかりでしたが、これらの中で特に優れた 40 団体を表彰することとなりました。

グランプリは、「中学生の部」の「岩手県大槌町立吉里吉里中学校」です。東日本大震災後に新設された「ふるさと科」での学習を通じて、主体的に判断し行動する子どもの育成に取り組んでいます。震災では犠牲者の多くが高齢者だったこと、高齢者を避難させるために命を落とした消防団員がいたことを学び、今回のプロジェクトを立ち上げました。中学生が作った巾着袋を高齢者に直接配り、高齢者はその中にお菓子を入れて、一緒に避難した子どもたちにお菓子を配るというユニークな取り組みです。「高齢者である自分達が逃げるのが子ども達の役に立つ」という視点で、地域の高齢者の防災意識を高める工夫が評価され、見事グランプリに輝きました。

ぼうさい大賞「小学生の部」は、「高知県四万十町立興津小学校」です。2003 年から毎年継続して防災マップを作成し、2005 年からは地域と一体となって防災教育・活動に取り組んできました。今年度末をもって閉校となることは残念ですが、どうしたら興津地区の住民全員が助かることができるのか、という難問に取り組んできた 20 年間の成果や、児童たちの地域への思いは残り続けます。地域の高齢者の声を聴き、防災と健康づくりを目指す取り組みが評価され、見事ぼうさい大賞に選ばれました。

ぼうさい大賞「高校生の部」は、「熊本県立熊本農業高等学校農業土木科 3 年生」です。「農業高校を地域の防災拠点に」というテーマを、校内の公園を改修するという農業土木科の

活動の中に取り入れ、コンセプトから測量、設計、施工まで、すべて生徒たちが作り上げました。地域コミュニティとの関わりに、学校で学んだ農業土木の技術や知識を活かし、生徒自らが組織的に取り組んだ点が評価され、初めての応募で見事ぼうさい大賞に選ばれました。

ぼうさい大賞「大学生の部」は、「静岡大学教育学部藤井基貴研究室」です。「日本の若者を BOSAI の世界へ」というテーマで IT を活用したプロジェクトを展開しています。防災アプリを地域の企業と共同で開発し、高校での防災教育に加え、企業や一般家庭でも導入・活用されています。民間企業や行政、JICA 等と連携して、地域にとどまらず、世界に拡大していこうとする取り組みが高く評価され、見事ぼうさい大賞に選ばれました。

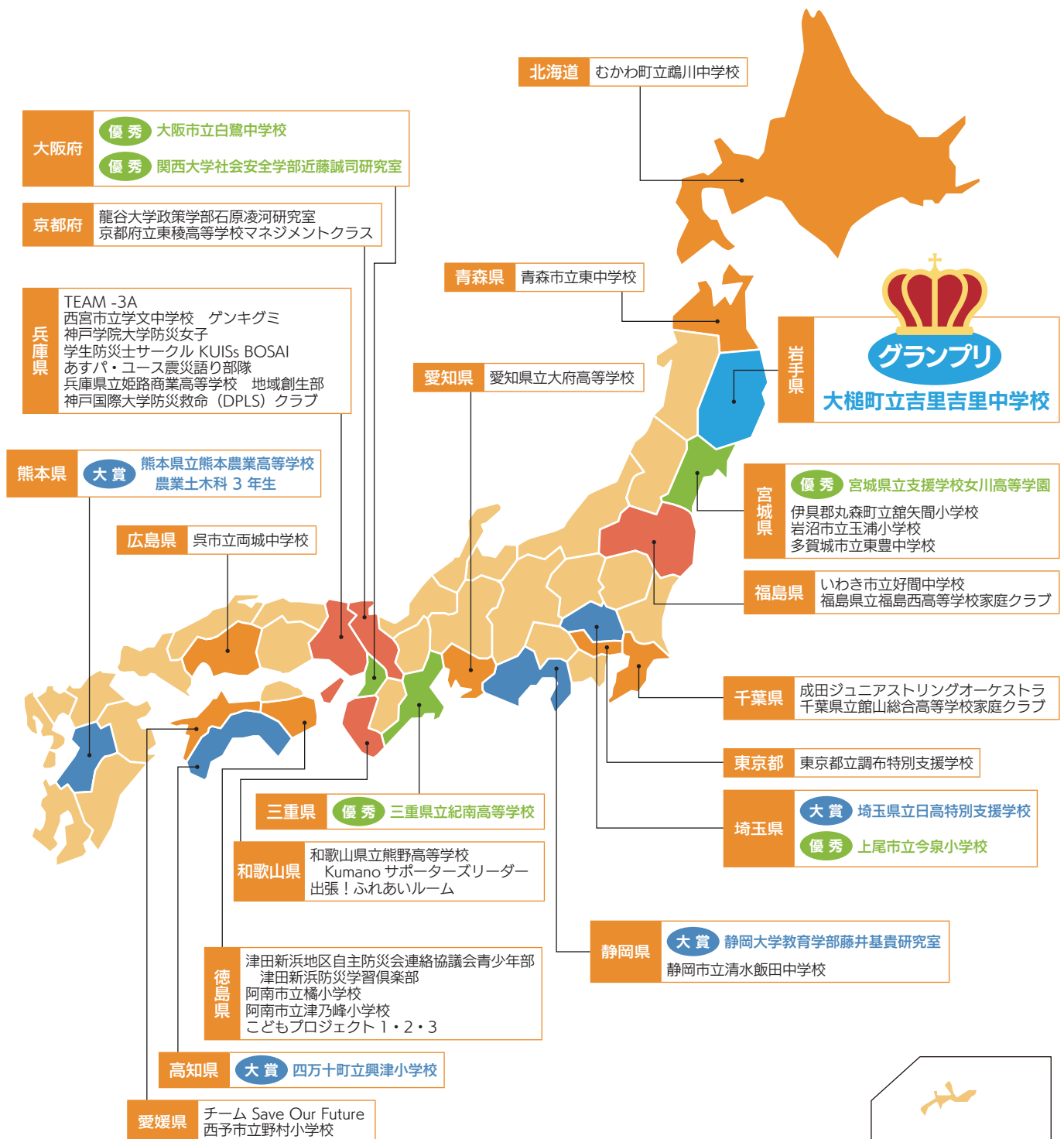
ぼうさい大賞「特別支援学校・団体の部」は、「埼玉県立日高特別支援学校」です。この学校では継続的に独自の防災教育プログラムを進めています。10 年目となる防災体験プログラムでは、コロナ禍での経験をもとにオンラインを併用し、全国の参加者と交流しました。また復興イベントで使用するキャンドルも生徒たちの手作りです。防災クエストの実施、防災ソングの作成、イベントでのブース発表、県内の教職員による避難所設営訓練等、多彩な活動が評価され、見事ぼうさい大賞に選ばれました。

このほか、防災教育、防災活動に質の高い取り組みをされた各校に、優秀賞や奨励賞を始め、UR レジリエンス賞、はばタン賞、だいじょうぶ賞、フロンティア賞、そして、継続こそ力賞の各特別賞を授与しました。

これからも防災・減災の取り組みを継続し、それぞれの地域、学校、家庭において、その取り組みを伝え広げていかれることを期待しています。

受賞校・団体のご紹介

今年度は、40 校・団体が受賞しました。
来年度も、更にレベルアップした取り組みのご応募をお待ちしています。



賞	部 門	都道府県	学校・団体名
グランプリ	中学生部門	岩 手 県	大槌町立吉里吉里中学校
ぼうさい大賞	小学生部門	高 知 県	四万十町立興津小学校
	高校生部門	熊 本 県	熊本県立熊本農業高等学校 農業土木科 3 年生
	大学生部門	静 岡 県	静岡大学教育学部藤井基貴研究室
	特別支援学校・団体部門	埼 玉 県	埼玉県立日高特別支援学校
優秀賞	小学生部門	埼 玉 県	上尾市立今泉小学校
	中学生部門	大 阪 府	大阪市立白鷺中学校
	高校生部門	三 重 県	三重県立紀南高等学校
	大学生部門	大 阪 府	関西大学社会安全学部近藤誠司研究室
	特別支援学校・団体部門	宮 城 県	宮城県立支援学校女川高等学園
奨励賞	小学生部門	宮 城 県	伊具郡丸森町立館矢間小学校
	中学生部門	福 島 県	いわき市立好間中学校
	高校生部門	和歌山県	和歌山県立熊野高等学校 Kumano サポーターズリーダー
	大学生部門	京 都 府	龍谷大学政策学部石原凌河研究室
	特別支援学校・団体部門	兵 庫 県	TEAM -3A

令和 5 年度 特別賞		説 明	学校・団体名
URレジリエンス賞		被害を減らすと同時に、復旧までの時間を短くすることにより、社会に及ぼす影響を減らす“レジリエンス（縮災）”という考え方に繋がる取り組みに贈られます	岩沼市立玉浦小学校（宮城県）、むかわ町立鵠川中学校（北海道） 西宮市立学文中学校 ゲンキグミ（兵庫県） 福島県立福島西高等学校 家庭クラブ（福島県） チーム Save Our Future（愛媛県）、神戸学院大学防災女子（兵庫県） 津田新浜地区自主防災会連絡協議会青少年部 津田新浜防災学習倶楽部（徳島県）
はばタン賞		阪神・淡路大震災以降に被災した地域にエールを送るため、これら地域を対象に被災の経験と教訓から生まれた優れた活動に贈られます	阿南市立橘小学校（徳島県）、多賀城市立東豊中学校（宮城県） 呉市立両城中学校（広島県） 学生防災士サークル KUISs BOSAI（兵庫県） あすパ・ユース震災語り部隊（兵庫県）
だいじょうぶ賞		安心・安全な街づくりを目指す「だいじょうぶ」キャンペーン実行委員会にちなんだ賞 防犯や街の身近な安全、安心・安全な街づくりを目指す優れた活動に贈られます	京都府立東稜高等学校 マネジメントクラス（京都府） 成田ジュニアストリングオーケストラ（千葉県）
今年度「テーマ賞」	フロンティア賞	防災教育活動の広がりを促進するための賞 過去に受賞がなかった地域・分野での先導的な取組または初応募の優れた取り組みに贈られる賞です	西予市立野村小学校（愛媛県）、静岡市立清水飯田中学校（静岡県） 兵庫県立姫路商業高等学校 地域創生部（兵庫県） 東京都立調布特別支援学校（東京都） 出張！ふれあいルーム（和歌山県）
	継続こそ力賞	過去数年に渡り継続的に実施された優れた取り組みに贈られる賞です	阿南市立津乃峰小学校（徳島県）、青森市立東中学校（青森県） 千葉県立館山総合高等学校 家庭クラブ（千葉県） 愛知県立大府高等学校（愛知県） 神戸国際大学防災救命（DPLS）クラブ（兵庫県） こどもプロジェクト 1・2・3（徳島県）



岩手県

大槌町立吉里吉里中学校

「巾着で命をつなげ ～HAPPY&SAFETYプロジェクト～」

東日本大震災で甚大な被害を受けた大槌町で暮らす私たちは、震災後に新設された「ふるさと科」の学習で「12年前の震災犠牲者の7割が高齢者であった」ことを学んだ。また、「自分は年寄りだから逃げなくていい」と考え避難しなかった方がいたこと、その方々を説得し避難させようとして命を落とした消防団員の方がいたことを学んだ。地域の方を対象に実施したアンケートでは、「自分のために逃げる」という回答がほとんどであった。そこで「避難することが子供たちの役に立つ」という視点を持ってもらうことが高齢者の避難意識を一層高めることにつながると考えた。プロジェクトは地域をまきこみ、巾着を中学生が作り高齢者に直接配布し、地域の避難訓練で実施することとなった。高齢者がお菓子入りの巾着をもって避難し、不安な子供たちにお菓子を配る。もらった子供たちはH A P P Y、避難した高齢者はS A F E T Y「巾着袋で命をつなげ～HAPPY&SAFETYプロジェクト～」のスタートである。



活動内容（実施予定も含む）

- ・ ふるさと科での「個人探求」学習の実施とまとめ（校内外に発信）
- ・ 役場防災対策課の方による講話
- ・ 地域の方を対象にしたアンケートの実施
- ・ 家庭科の時間を活用した巾着袋の作成と高齢者への配布
- ・ 地域住民や消防団、行政との事前打ち合わせの実施
- ・ 防災避難訓練と事後インタビューの実施

11月の本校独自の「防災週間」に合わせ地域住民とともに防災避難訓練を実施、高齢者や関係者に成果や改善点などの意見をもらう。



成果

- ・ 地域の実態に合った防災学習を進め、子供たちの防災意識が高まる。
- ・ 「子供と関わること」を手掛かりに高齢者の避難意識が高まる。
- ・ 地域全体で防災活動に取り組み、子供たちと地域のつながりを一層強め地域全体の防災意識が高まる。

工夫・ポイント

- ・ 中学生が探究学習の中で独自に考え、課題解決に向けて地域を巻き込んだ。
- ・ 防災学習を通して地域課題へ取り組み、ふるさとへの思いを一層高める。
- ・ 事前打ち合わせを学校、保護者、地域、行政が一緒に行い、コミュニティ・スクールの一層の充実を図る。

これまで、これから

- ・ 「防災週間」を設定し、小中を一貫した9年間の学びとしての定着は年々充実してきている。
- ・ 子供たちの「自分たちが地域の一員である」という意識が高まっており、地域の方々の「自分の地域の子供たち」という意識にもつながっている。
- ・ 教職員が異動しても、防災学習が教育課程の中に位置づけられており、見通しを持つことができる。
- ・ 学校、地域、保護者、行政のそれぞれが積極的に防災への取り組みに関わり、防災意識は、年々高まっている。

高知県

四万十町立興津小学校

「地域ぐるみのパワフル防災マップ作成活動」

高齢化が進む興津地区では、「災害時に津波から逃げる」はもちろんのこと、「避難訓練」でさえも、参加が難しい人が多い。そこで「防災のための健康増進」を掲げ、「興津防災パワフルウォーキングマップ」を作成した。これは、ウォークしながら、体力を作り興津のいいところも眺めながら、防災についても考えることができるようなマップであり、「防災×健康」という視点での取り組みである。興津小学校は今年度末で閉校するが、このマップが地域に浸透することで、学校がなくなっても児童らが地域のために作成した防災マップはその思いとともに残り続ける。そのために「ウォーキングコース」を新たに作ったり、実際に地域住民とウォークしたりすることで、“閉校後も継続した浸透”を期待し、防災文化の継承発展をめざしている。

活動内容（実施予定も含む）

- ・ウォーキングコースの設定・確認

様々なウォーキングコースを設定、実際に歩き、距離や時間を計測、健康増進のために、様々な事情を抱えた人に対して、より現実的なコースとなるよう検討した。

- ・ウォーキングマップのデジタル化

Google マイマップを活用し、デジタル化、QR コードをマップに貼り付ける。

- ・パワフルスポットの設定

地区内に4基ある津波避難タワーを「パワフルスポット」として設定。タワー下に「その場でできる健康体操パネル」を設置した。

- ・地域住民と防災パワフルウォーキングマップを使ったコラボ

地域住民と一緒にマップを使い、マップのPRや地域への浸透を目指す。

- ・防災だよりの発行

防災マップを防災だよりと同時に全戸配布する。



成果

「小学校が閉校しても児童らの地域への思いとともに、防災マップが残り続けること」。そのために役場（教育委員会・危機管理課・健康福祉課）、大学、興津地区自主防災組織、町内の企業などが連携して活動を進めている。子ども達の活動が周囲の取り組みを具体的に発展させてきたこと、また将来を見据えていることが、興津小学校および興津地区が両輪となって進めてきた防災活動のもっとも評価すべき成果である。

工夫・ポイント

- ・高齢化が進む地域では「健康」というキーワードが、防災活動にも重要。「どうしたら興津全員助かれるのか？」という難問に対して、子ども達は「それを見て歩けば健康になれる防災マップ」という答えを導き出した。
- ・防災マップを「作って終わり」でなく、地域に浸透させるために、実際に地域住民と試してみる学習会も企画した。子ども達自身の思いから発現した活動は、興津小学校、興津地区にとっての財産でもある。

これまで、これから

昨年度は、今年度のマップのベースになる「興津防災パワフルウォーキングマップ」を作成し、四万十町立東又小学校との交流学習で、マップを使って興津の防災について一緒に学習した。今年度も地域住民との活動を実施する。

マップの地域への浸透については、防災だよりの全戸配布や学習発表会などの実施に加え、四万十町危機管理課、健康福祉課、そしてこの活動に参画し、防災マップの継続した活用を申し出てくれた株式会社アクトワンの協力を模索している。

熊本県

熊本県立熊本農業高等学校 農業土木科 3 年生

「地域のコミュニティ拠点となる防災公園づくり」

私たちは、熊本地震や、令和 2 年には熊本 7 月豪雨での水害など多くの災害を体験してきました。ボランティア活動にクラスの仲間と参加する中で、学校で学んだ農業土木の知識や技術を活かした自発的活動ができないかと考えました。校内の公園づくりのコンセプトを考える機会があり、地域のコミュニティ拠点となる防災公園づくりを目指すことにしました。プロジェクト班がまとめた構想案を基に、コンセプトから測量、設計、施工まで自分たちで作り上げた公園。仲間とぶつかりながら、少しでもより良いものを、いざというときには「地域の人たちの役に立って欲しい」との思いを込めた公園です。この公園づくりを通し、私たちは皆、お互いの成長を実感しました。来年 4 月には、全国に旅立つクラスの仲間、土木技術者としてあるいは農業土木技術者として、懸命に取り組むことを誓い合うことが出来ました。

活動内容（実施予定も含む）

- ・ 測量を行い平面図を作成、施工に必要な基準点を設置。農業土木設計の意義である「自然環境との調和、共生」の考えのもとに、防災公園の役割を果たすための構想を練った。
- ・ 災害時には学校全体が避難所としての機能を果たせるように計画し、施工した。（四季折々の花やハーブを楽しめるゾーン、耐火レンガを使ったかまどベンチ、ユニバーサルデザインを採用した園道など：令和 5 年 3 月末、工事完了）
- ・ 今年度は公園の管理と啓発活動に取り組んだ。
 - ①プロジェクト研究としてまとめ、学校農業クラブで全校生徒に発表した。
 - ②取組を通じた体験をまとめ、クラス代表の意見発表として九州大会に出場し、多くの農業高校生に私たちの取組を発表した。
 - ③クラスの仲間が啓発活動を推進した。
- ・ 専門学科で学ぶ高校生に防災公園の園道の材料として用いた材料「山砂モルタル」の研究と防災公園の造成を中心にまとめ、取組内容を発信した。
- ・ 熊本市や地域の方に内容を知ってもらい、公園を各種イベントに活用、コミュニティ拠点としても活用する。



成果

全国各地に点在する農業高校の存在意義、コミュニティ拠点としての必要性、そして防災拠点、避難所としての農業高校のシーズ（豊富な地下水や広いスペース、動物と一緒に避難可能など）を知ってもらい、高校生が防災について考える機会になった。また、地域の人々に農業高校をアピールする機会となった。

工夫・ポイント

コンセプトから測量、設計、施工まで自分たちで作った公園。仲間とぶつかりながら、少しでもより良いものを、いざというときには「地域の人たちの役に立って欲しい」との思いを込めた公園。農業土木科で学んだ私たちしかない発想と行動力、それに何よりクラスの団結力でこの公園を完成させることが出来た。

これまで、これから

- ・ 防災 LHR 年に 2 回 避難訓練年 2 回
- ・ コミュニティスクールは、熊本県では防災型として始まった。熊本農業高校も元三町や川尻校区、小中学校と連携した活発な活動を展開している。次年度は、本校で地域挙げての避難訓練及び避難所開設訓練を実施。

工事は、地域のコミュニティを一番に考え、すべての人が利用できること、災害時を見据えた構造にし、SDGs の考え方や施工後の維持管理など、総合的なバランスを考えた構想にすることが大切。私たちの学びを全国に発信し、全国の農業高校の存在意義を高め、地域の防災拠点、コミュニティ拠点として貢献できることを願っている。

静岡県

静岡大学教育学部藤井基貴研究室

「教職を目指す学生による「日本の若者をBOSAIの世界へ：防災×IT」プロジェクト」

私たちの研究室では東日本大震災をきっかけとして防災教育の教材・授業開発を進めてきました。研究室では「脅さない防災」「考える防災」「伝える防災」を柱として幼児から高齢者までを対象とした包括的な取組を先輩から後輩へと受け継ぎ、国内外に活動の場を広げています。現在もっとも力を入れた取組は「日本の若者を BOSAI の世界へ：防災× IT」プロジェクトです。同プロジェクトは IT を活用しながら高校生による防災講座を支援するもので、静岡県・愛知県の八つの高校と連携し、2,000 名を超える高校生が参加しています。今年度はデジタルワークブックを制作・配布するとともに、学生代表が一般社団法人 BOSAI Edulab を設立して、動画配信や SNS による遠隔指導の仕組みを構築しました。また、2023 年 3 月には地元企業と共同開発した防災アプリ「クロスゼロ for ファミリー」をリリースし、学校や家庭で活用・普及を図っています（現ダウンロード数：2,000 件以上）。

活動内容（実施予定も含む）

2022 年

- ・ デジタルワークブック「BOSAI ユースアンバサダー」の制作
- ・ 学生代表が一般社団法人を設立、高校での出前講座 など

2023 年

- ・ 防災アプリ「クロスゼロ for ファミリー」開発と改善（連携先：建設システム）
- ・ 被災証言をもとにした劇「Forever」（スターズアーツ）への協力。「防災×演劇」意見交換会の開催
- ・ フィンランド・オウル大学との研究交流。「防災× IT」カンファレンスへの参加
- ・ 「日本の若者を BOSAI の世界へ：防災× IT」プロジェクト実施
- ・ 防災アプリ「クロスゼロ」開発と改善（連携先：建設システム）
- ・ 学校ごとの「BOSAI ユースアンバサダープロジェクト」成果報告会開催
- ・ 静岡市清水区の台風 15 号被害に関する調査研究、学生代表による報告
- ・ フォーラム参加、プロジェクトに関する研究報告、小・中学校、高校での出前講座 など



成果

高校生の防災講座を支援。この取組は「静岡県ふじのくにジュニア防災士」連携プログラムとして認定され、高校生には静岡県から「ジュニア防災士」の称号を授与されることとなった。

防災アプリ「クロスゼロ」を地元企業と共同開発。さらにコンテンツを拡充し「地震・津波」「大雨・台風編」「土砂災害編」等の動画コンテンツの内蔵、防災検定試験を実装する。ユーザーが自主的に防災学習を行える仕組みを提案、若者世代の防災意識の向上を図り、主体的に活動する防災市民の育成を目指している。

防災紙芝居、防災絵本、イラスト教材、授業案等を国内の教育機関等へ継続して提供。JICA の支援で昨年度はエクアドル、トルコ、今年度はペルー、フィンランドにも教材を提供した。

2022 年 9 月の台風 15 号の復旧と IT 支援に関する調査報告が書籍『防災教育と ICT』（2023 年 3 月）に掲載され、2023 年 8 月のシンポジウムで、復興時のデジタルデバインドに関する問題を提起した。

工夫・ポイント

地域性：静岡県を中心に 500 以上の学校と連携して防災教育の取組を進めた。また地元の防災センターや自治体等との連携協力も年々深めている。

独創性：教職を目指す学生を主体として、汎用性の高い教材や IT ツールの開発を進め、防災の担い手として高校生に重点をおいた教育支援を展開している。

自主性：学生サークル（静岡大学学生防災ネットワーク）を立ち上げ、今年度は一般社団法人を設立する等、より持続可能な取組となるように工夫を重ねている。

継続性：取組は 13 年にわたって継続、「ぼうさい甲子園」で交流のある学校や団体とも連携して、防災教育のプラットフォームづくりに貢献することを目指している。

これまで、これから

前年度からの高校生への教育支援、今年度は IT 化を促進したことで取組の規模を拡張した。連携している高校では、生徒が防災に対して「能動的・市民的」な姿勢へ変わったと評価された。また、静岡新聞や読売新聞で取組についての特集記事が組まれ、県外や海外に開発済の教材や仕組みの提供を進めている。



埼玉県

埼玉県立日高特別支援学校

「アフターコロナで再びつながれひろがれ!かわせみ防災」

コロナ禍が終わり、これまで感染症対策を理由に制限されていた防災活動を再開した。PTA や行政、企業、社協やボランティア、専門家と連携し、4 年ぶりの防災体験プログラムをハイブリット式で実施した。7 つのブースの体験ができた。地域の防災イベントにも参加し、ソルトキャンドルを防災啓発用に配布する。防災委員会ではこれまでの毎月 11 日「ゾウの日」の啓発活動の他、復興イベントで使用するキャンドル作り、本校文化祭での展示、防災ソング・デジタル絵本製作などの活動を行う。ICT 活用として防災委員会を中心にマイクラフト風の防災クイズを制作し、全校で取り組む。防災学習については、専門家による校内の非構造物点検でリスク評価をしたものを元に全クラスで「危険な場所と安全な場所」についての防災学習を行った。他にも訓練の事前事後指導用の動画やワークシート活用、学部毎に各教科で防災について取り上げている。

活動内容（実施予定も含む）

- ・「かわせみ防災クエスト」を防災イベントに出展。コロナ禍で培ったオンラインを併用、ハイブリッド式で開催し全国の参加者と交流
- ・避難訓練の事前事後学習で活用できるようスライドや動画、ワークシートを作成し、危険な場所や安全な場所を考える授業を設定
- ・県内の特別支援学校の教職員も参加して避難所設営訓練を実施
- ・福島大学天野和彦氏と一緒に防災ソングを作成
- ・聖学院大学の学生による中・高等部生徒への大川小学校や被災地支援についての語り継ぎ活動
- ・防災委員会で防災ソング制作・YouTube の動画製作 // かわせみ防災ゲーム内容検討、制作、実施
- ・県内外のイベント等に参加、交流、活動発表 など



成果

コロナ禍で停滞した防災への活動が、感染症対策への配慮もしながら再開できた。担任が児童生徒それぞれに合わせた防災学習を実施したことで、児童生徒の取り組みやすい内容で意欲的に学ぶことができた。

防災ソングは「かわせみ防災タイム」の内容や日常の日々の大切さを盛り込みんだ。制作した歌は校内の YouTube にアップしたほか、歌の内容を元にデジタル絵本を展開し校内外で歌い継ぎ、語り継ぎができる。

パワーポイントを使いマイクラフト風のかわせみ防災ゲームを制作。自分たちでアレンジすることもできる。繰り返し学び、定着を図ることができる。



工夫・ポイント

10 年目の防災体験プログラムはオンラインを併用し、ハイブリット式で実施した。感染症対策のため参加者のグループ分けを工夫した。社協の協力で地域の中高生のボランティアも参加し、地域や行政との連携、専門家の協力を得ながら防災について学んだ。参加者向けに動画配信をし、事前学習と事後の復習ができるようにした。参加した放課後デイサービスの事業所では課題や備えについて共有した。

日高市の企業が製作した粉末野菜は、災害時に摂食障害のある方の栄養補給に有効。防災体験イベントの趣旨を伝えて商品を提供してもらい、災害時に有効な献立を考えた。またこれらのレシピを他の障害当事者団体、地域や支援者へ啓発した。

NPO 法人減災教育普及協会の協力で本校のリスク評価を実施、それを元に防災学習用ワークシートを作成した。小学部では教科「生活科」を教育課程に組み込み、他学部でも教科の中に防災を取り入れている。

これまで、これから

かわせみ防災クエストは他の施設のイベントでも実施され、教材として有効性を確認することができた。反省点をもとに改良し、開催する施設が変わっても実施できるようパッケージ化した。

はるかのひまわりプロジェクトは各学部の授業の中にもつながりが持てるきっかけとなり、種を渡した埼玉県立越谷特別支援学校でも授業に取り入れてくれた。

コロナ禍が終わり、本校への防災の取り組み協力依頼も増えている機会に、取り組んできたことを地域に伝えていきたい。聖学院大学とはキャリア教育の一環としても交流を継続していきたい。

優 秀 賞

埼玉県

上尾市立今泉小学校

「今っ子防災隊 まちづくりプロジェクト ～災害に強く誰にでも住みよいまちへ～」

児童はSDGsのゴール11「住み続けられるまちづくりを」の課題解決を行う中で、上尾市の防災意識を高めるために自身とともに上尾市の防災・減災の取組に協力してもらえ、企業・団体を探し、協力依頼を要請するとともに自分たちの活動計画書及び企業・団体に期待する協力内容についての提案書を作成し、様々な企業・団体に計画書兼提案書を送付した。上尾市や自衛隊の協力を得て、避難所の運営に関われる力を養い、今っ子ボランティアクラブを立ち上げた。2月には保護者を避難者役にして避難所の運営を行った。また、ラジオ局の協力を得て、上尾市や伊奈町へ防災に関する情報を提供する今っ子防災ラジオの収録を行い、



子供による市民・町民のための新しい防災番組を作ることができた。他にも様々な児童による取組が行われたことによって、上尾市の小学生から大人、障がいのある方、行政、企業・団体などの多くの人々の防災の輪を広げることができた。

優 秀 賞

大阪府

大阪市立白鷺中学校

「防災を自分事に! ～地域防災の未来を担う白鷺中学校生～」

本校は教育の3本柱の一つに防災教育を掲げ、「思いやり」と「そうぞう力」を持ってつながりを大切にした防災教育を実践している。命の教育・人権教育として「心」の教育、災害時に身を守る実動訓練「技」の教育、人と人とのつながり、生き方を学び体現していくキャリア教育として「体」の教育を実践し防災の心技体を育む。全校生徒・教職員・保護者・地域・関係諸機関と協働して取り組む防災授業『白鷺防災デー』は発達段階に応じた内容で学年ごとに取り組み、自助・共助・公助を学ぶ場として定着している。3年間の学びを通して地域防災の担い手となる基礎をつくる。また生徒自主防災チームは防災学習会、校外学習、校区小学校・地域に向けての防災啓発活動でICTを積極的に活用し思考力・判断力・表現力を向上させリーダーとしての資質の涵養を目指している。「住み続けられるまちづくり」の担い手として生徒の成長を願う保護者・地域からの期待も大きい。



優 秀 賞

三重県

三重県立紀南高等学校

「三重県立紀南高等学校 防災きにゃんプロジェクト」

紀伊半島大水害の被災から10年目となった令和3年、地元御浜町との合同防災ワークショップで講師に迎えた宮城県立石巻西高校元校長の齋藤幸男先生との出会いから、被災地で学ぶ「三重県学校防災ボランティア事業」が実施され、7人の生徒が参加した。参加生徒は、現地で目にした命の明暗を分けた2校の小学校に着目し、「震災で悲しみを抱える人をつくらないまちづくり」を目標に掲げ、誰もが避難しやすい案内版、ピクトグラムの設置を目指して活動を開始した。御浜町総務課に相談すると、設置には、50万円以上の費用がかかることがわかったため、昨年度、地域の事業所から防災用品の協賛を得て「非常持ち出し袋」を作り、地元の道の駅で販売した。これまでコミュニティ・スクールの取組で得た他の商品の売上金と合わせて目標額を達成したため、今年度御浜町へ寄付を行い、年内にこのプロジェクトで誕生したピクトグラムが設置されることとなっている。



優 秀 賞

大阪府

関西大学社会安全学部近藤誠司研究室

「みんなのぼうさい ～地域メディアでインクルーシブ防災を実現する～」

一人でも多くの命を守るために、特に、弱い立場の人たちにこそ手を差し伸べるために、「インクルーシブ防災」の実現を目指して、数多くの防災プロジェクトを全国各地で実施しています。特徴的なのは、地域に応じた地域メディアを創発・活用して、取り組みの輪をどんどん押し広げていることです。コミュニティFM放送での情報発信（滋賀県草津市・兵庫県尼崎市）、ケーブルテレビ網を活用した情報発信（京都府京丹波町）、手作りの「防災かわら版」によって高齢者に防災情報を伝達（福井県福井市・大阪府吹田市）、校内放送を活用した小学校での取り組み（神戸市長田区）。さらに今、取り組みの輪は、介護事業者、難病患者団体、こども園・幼稚園などにも広がっています。365日、近藤ゼミの情報が発信されない日はありません。ゼミ開講10年。獲得したタイトルは50。卒業生ともコラボして展開を発展させ続けています。「防災活動に卒業なし」です。



優 秀 賞

宮城県

宮城県立支援学校女川高等学園

「防災教育を地域の生涯学習へ ～学校運営協議会との協働～」

「地域と共に学ぶ防災教育の充実」これは、開校以来、本校が掲げている目標である。学校があるのは、12年前に未曾有の自然災害を経験した宮城県女川町。大きな災害を経験した住民と共に学ぶ防災教育の推進を重要課題として取り組んでいる。試行錯誤を重ね、災害から生命と暮らしを守ることに向き合うため、生徒自身が主体となって実践する『総合防災訓練』という学びの仕組みを確立するものの、地域への展開はCOVID-19により阻まれた。しかし、2022年から始まった学校運営協議会の推進や今年5月のCOVID-19の5類移行を契機に、この3年間停滞した地域との交流を再開し、“共に学ぶ”土壌作りを開始した。9月の『総合防災訓練』、10月以降の防災研修会（HUG、原子力災害）は、町や行政区長らが地域へ働き掛けし、参加者を募っている。地域と学校とが役割を分担し、共に防災という共通の課題に向き合い、生涯学習への一歩を踏み出した。



奨 励 賞

宮城県

伊具郡丸森町立舘矢間小学校

「自分たちで防災について課題を設定し、調べまとめ発信する。」

令和元年度東日本台風で町全体が被災し、全国の支援により着実に復興が進んでいる。少子化により令和4年に学校統合し、学区の広がりにともない災害リスクがさらに高くなっている。それらを踏まえて災害時に地域ぐるみで助け合おうとする気持ちを高めることをねらいとして令和4年11月に「丸森未来防災フェスタ」を開催した。被災経験者からの講話等を基に5・6年児童が考えた防災・減災に関する具体的な取組や提案を地域の方に発表した。また防災グッズの展示、段ボールベッド体験を行った。児童の感想「避難所やボランティアなどについて、いろいろな解決策を考えていて分かりやすかった。」「丸森防災フェスタで学んだことを今後も生かし生活していきたい。」地域の感想「子供たちや先生の意識の高まりを感じた。また地域への発信という意味でもよい取り組みだ。コミュニティー単位での取り組みを大いに参考にしていきたい。」

「ぼうさい甲子園」の特設サイトを開設しています／

防災教育の力と知恵の広がりを応援するため、「ぼうさい甲子園」の特設サイトを開設しています。

受賞校・団体の紹介動画や取り組み状況など、本誌では伝えきれない内容を掲載しています。是非ご覧ください。

<https://bousai-koushien.net/>

福島県

いわき市立好間中学校

「地域と共に、総合的な学習の時間における好間中防災教育」

令和元年台風19号で本校の学区も甚大な被害に見舞われた。そこで、昨年度より本校の総合的な学習の時間において防災教育を実施することとなり、本年度は2年目を迎えることができた。今年度も、市の災害対策課の全面バックアップ、そして新たに地域の大学生、地域の消防団、地域の自治防災に関わる方にも防災学習に参加して頂き地域と共に防災教育を行い、防災に対する意識を向上させる取組を行った。1学年は「自助」、2学年は「公助」、3学年は「共助」をテーマに防災学習を行い、今年度はさらに「高齢者や障がいを抱える人たち」の視点も取り入れた防災学習を実施した。8月には市役所において市長や防災教育に関わってくださった人たちの前で防災学習のまとめを発表し、市長を始め地域の方々より高い評価を得ることができた。学習を通して、生徒だけでなく地域の方々と共に好間町の防災意識を高めることに貢献することができた。

和歌山県

和歌山県立熊野高等学校 Kumano サポーターズリーダー

「空き家問題とJR車両を使用した避難訓練への参加」

平成23年紀伊半島大水害では、死者・行方不明者61名という甚大な被害に合い、当時の仲間が亡くなった。この災害の教訓を生かそうと地域の高齢者・学童・障がい者など災害時要援護者となりうる人々と普段から積極的に触れ合い、絆作りを行っている。高齢者の安否確認では、家具固定調査と昨年5月から住宅用火災報知器の設置確認を行っている。また和歌山県は空き家率（別荘を除く）全国NO.1であり、災害時は避難経路の妨げになるため、移住促進や利活用を活性化させるため、訪問した地域の空き家の聞き取り調査を行い、行政や地元の企業と空き家利活用プラットフォームを立ち上げている。毎年本校では寮に入れない生徒がいるため、空き家を下宿に提供していただけないか提言をし、その結果提供者も現れている。また県内のJRきのくに線は海岸沿いにあり、乗車中の避難訓練に参加し啓発活動を行った。

京都府

龍谷大学政策学部石原凌河研究室

「対話による防災教育の変革－波及型学校防災教育の実践を通じて－」

龍谷大学政策学部石原凌河研究室では、2016年の研究室発足当初から徳島県阿南市の小学校を対象に、延べ30校で防災教育出前授業を継続して実施してきている。学校の先生や防災に詳しい地域の方々との「対話」を通じて創り上げたオーダーメイド型の防災教育授業を展開している。今年度は、家庭や地域への波及を見据えたタイムカプセルを用いた防災教育出前授業と、学校教員への水平展開を目指した防災教育出前授業を実践してきた。学校防災教育出前授業を基点に、児童と家族や地域の人々との対話を通じて＜繋ぐ＞ことで、地域全体の防災力の向上も見据えている点と、児童・生徒に適した防災教育を目指して、大学生と教員とが対話を重ねながら双方で防災教育授業を創り上げることで、児童にとって真に有用な防災教育を実現できるとともに、学校教員が主体的に防災教育に関与できるまでサポートできている点が私たちの取り組みの最大の特色である。

兵庫県

TEAM-3A

「いつでもどこでもだれでも楽しくぼうさい」

元は2013年明石南高校でスタートした「めいなん防災ジュニアリーダー MRDP」のメンバーが2023年5月学校単位での活動をさらに広げたいという思いの高校生11名とその先輩の卒業生13名によって設立された。旧チームは主に学校の周辺地域での活動であったが、昨年から明石市内の様々な地域や団体からの依頼を受けて活動するようになった。すでに防災DX化プロジェクトのメンバーや明石市防災会議専門委員に選ばれるなど明石市の行政機関からは高い評価をいただいていたが、今年度からこのチームが核となって若い世代が積極的に地域防災に関わっていけるようにサポートする「未来のあかしを担うユース育成プロジェクト」を立ち上げることができた。すでに8月に市長主催で実施される「若者会議」への出席、11月に予定されている市の総合防災訓練へのブース出展のほか様々な団体からのイベントが依頼されている。

表彰式・発表会 概要



毎日新聞社提供

趣旨

阪神・淡路大震災の経験を通して学んだ自然の驚異や生命の尊さ、ともに生きることの大切さを考える『ぼうさい教育』を推進し、未来に向け安全で安心な社会をつくる一助とします。児童・生徒・学生が学校や地域において主体的に取り組む、『ぼうさい教育』に関する先進的な活動を顕彰します。

プログラム

令和 5 年 12 月 23 日 (土) 兵庫県公館

13:00	開 会 開会のことば 主催者あいさつ	●河田 恵昭 (公財) ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター長 ●齋藤 元彦 兵庫県知事 ●木戸 哲 毎日新聞大阪本社編集局長
13:20	表彰式	● 1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」表彰 (グランプリ・ぼうさい大賞、優秀賞、奨励賞、URレジリエンス賞、はばタン賞、だいじょうぶ賞、フロンティア賞、継続こそ力賞) ● 防災力強化県民運動ポスターコンクール表彰 (ひょうご安全の日推進県民会議会長賞、人と防災未来センター長賞)
14:15	発表会	● 1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」受賞校・団体による活動発表 司会：兵庫県立姫路商業高等学校 放送部
15:55	講 評	●河田 恵昭
16:10	閉 会	

表彰式の様子

表彰式は、グランプリ・ぼうさい大賞からはじまり、来場者に表彰状や副賞が授与されました。



写真はいずれも毎日新聞社提供

会場展示の様子

会場には、受賞校・団体が作成した新聞やポスターが掲示されました。
各地での防災学習の成果が一堂に集まり、充実した見ごたえのある空間となりました。



発表会の様子

発表会は、グランプリ・ぼうさい大賞、優秀賞を受賞した10校が8分ずつ発表を行いました。
発表会の司会は兵庫県立姫路商業高等学校放送部が行いました。



グランプリ 大槌町立吉里吉里中学校
「巾着で命をつなげ 〜HAPPY&SAFETYプロジェクト〜」



ぼうさい大賞 四万十町立興津小学校
「地域ぐるみのパワフル防災マップ作成活動」



ぼうさい大賞 熊本県立熊本農業高等学校 農業土木科 3年生
「地域のコミュニティ拠点となる防災公園づくり」



ぼうさい大賞 静岡大学教育学部藤井基貴研究室
「教職を目指す学生による「日本の若者をBOSAIの世界へ」防災×ITプロジェクト」



ぼうさい大賞 埼玉県立日高特別支援学校
「アフターコロナで再びつながれひろがれ!かわせみ防災」



優秀賞 上尾市立今泉小学校
「今っ子防災隊 まちづくりプロジェクト 〜災害に強く誰にでも住みよいまちへ〜」



優秀賞 大阪市立白鷺中学校
「防災を自分事に! 〜地域防災の未来を担う白鷺中学校生〜」



優秀賞 三重県立紀南高等学校
「三重県立紀南高等学校 防災きにゃんプロジェクト」



優秀賞 関西大学社会安全学部近藤誠司研究室
「みんなのぼうさい 〜地域メディアでインクルーシブ防災を実現する〜」



優秀賞 宮城県立支援学校女川高等学園
「防災教育を地域の生涯学習へ 〜学校運営協議会との協働〜」



姫路商業高等学校放送部の小坂雅美さん、荒尾啓輔さんが司会を務めました。



10校による発表の写真は毎日新聞社提供

応募校・団体のご紹介

たくさんのご応募、ありがとうございます！
来年度のチャレンジをお待ちしています。

北海道	洞爺湖町立洞爺湖温泉小学校
北海道	北海道標津高等学校 生徒会
北海道	北海道別海高等学校 別海防災 School
北海道	小樽市 桂岡町内会
宮城県	気仙沼市立階上中学校
宮城県	宮城県気仙沼高校 3 年生防災教育探究チーム
宮城県	宮城県農業高等学校
宮城県	宮城県立聴覚支援学校高等部 機械システム科
秋田県	秋田県立ゆり支援学校 高等部 2 年生
福島県	檜葉町立檜葉中学校 社会科部会
茨城県	茨城県立北茨城特別支援学校
千葉県	千葉科学大学「学生消防隊」
千葉県	千葉県立香取特別支援学校
東京都	学習院女子中・高等科 ボランティア同好会
神奈川県	防災普及学生団体 Genkai (玄海)
長野県	長野県東御清翔高等学校
静岡県	東海大学付属静岡翔洋高等学校
愛知県	岡崎市立矢作中学校
愛知県	愛知工業大学名電高等学校 防災チーム MDPT

愛知県	名古屋中学校・高等学校 人文社会科学部防災チーム
愛知県	キッズぼうさい
滋賀県	滋賀県立八日市南高校 地域支援活動部
京都府	京都市立塔南・開建高等学校
京都府	京都府立井手やまぶき支援学校
兵庫県	西宮市立山口中学校
兵庫県	兵庫県立西脇高等学校
兵庫県	兵庫県立尼崎小田高等学校 看護医療・健康類型
兵庫県	明石工業高等専門学校・D-PRO135°
兵庫県	若者防災協議会
兵庫県	認定こども園七松幼稚園
広島県	呉市立横路中学校
徳島県	国府中学校 防災学習倶楽部
徳島県	徳島県立みなと高等学園
愛媛県	ジュニア防災リーダークラブ (中学生)
愛媛県	愛媛県立西条高等学校「防西's」
高知県	太平洋学園高等学校
宮崎県	宮崎県立宮崎農業高等学校 家庭クラブ

令和 5 年度 事業概要

- 応募開始…………… 令和 5 年 6 月 15 日
- 応募締切…………… 令和 5 年 9 月 30 日
- 選考委員会…………… 令和 5 年 10 月 31 日
- 記者発表…………… 令和 5 年 11 月 30 日
- 表彰式・発表会…………… 令和 5 年 12 月 23 日



兵庫県マスコット
はばタン

選考委員

委員長	河田 恵昭	(公財) ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 人と防災未来センター長
副委員長	遠藤 英二	兵庫県防災監 兼 危機管理部長
副委員長	木戸 哲	(株) 毎日新聞社大阪本社 編集局長
委員	安里 賀奈子	文部科学省総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課 課長
委員	篠田 康二	独立行政法人都市再生機構西日本支社 災害対応支援室長
委員	鈴木 あかね	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科 科長
委員	村上 威夫	内閣府政策統括官(防災担当) 付 参事官(普及啓発・連携担当)

(五十音順)